慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	實用の文學 : 女と花
Sub Title	Practical literature : Woman and flower
Author	森, 武之助(Mori, Takenosuke)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1954
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.3, (1954. 1) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00030001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

實用の文學

——女と花——

森武之助

女を花に喩えることは、まことに古くから行われていた。素朴な古代人といえども、ごく自然にたどり着いたものであろう。勿論、共に自然物である女と花を竝べて面白がつていたわけではない。花を觀て人間が勝手に頭の中で創り上げた、濃艶だとか淸楚だとか、可憐とか嫋々とかを連結して行つた對比である。もしかすると、その根本には、花も女も共に、實を生ずるという增殖作用が意識の下にあつてのことなのかもしれぬ。

摸騰渠等爾。婆那播左該騰摸。那爾騰柯母。干都倶之伊母我。磨陀左枳涅渠農

——(紀)——

女えの古い美しい嘆きが現れている歌だと思うのであげたが、特別に或る花と女を對比させたというわけではなく、美しい植物と女との間に微かな allegory をもたしてあるだけの歌に過ぎない。

萬葉集にも數多くの花喩えの歌が載せられている。殊に憶良のあげている——萩が花、尾花、葛花、なでしこの花、女郎花、または藤袴、朝貌の花——は、愛された花々らしく、それぞれ女の容色の喩えとして、又、戀愛の技巧の附屬品として卷八や卷十に夥しく散在している。しかし。これらも花の持つ色彩や形が必ずしも密接に介在せねばならぬという作品ではないようである。例え事實はどうあつたとしても、察知する手掛りの發見がむづかしいものである。

平安朝え來て、源氏物語に散在する片々を少し拾い上げてみると、夕霧の桓間見る紫の上は

氣高く清らに、さとうち匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろきかば櫻の咲き亂れたるを見る心地す

と、美しく比せられているし、もう一人の女主人公、玉鬘は、前者には及ばぬながらも

見るに笑まるるさまは、立ちも竝びぬべく見ゆ。八重山吹の咲き亂れたる盛りに露かかれる夕映ぞ、ふと思ひ出でらるる

と描かれている。又明石の上は

かの見つるさきざきを、櫻、山吹、といはば、これは藤の花とやいふべからむ。木高き木より咲きかかりて、風になびきたる匂ひはかくぞあるかしと、思ひよそへらる

と記述されている。唯、ここに注意される點は、源氏の作者が花の幻に惑はされる事を嫌ふ態度を示している點であつて、花は限りこそあれ、そそけたるしべなども打まじるかし。人の御かたちのよきは、たとへむ方なきものなり

と、非情の花を瞼の裏に寫すことを輕蔑しているのである。だから紫の上は

花といはば櫻にたとへても、なほ物より勝れたるけはひ殊にものし給ふ

と、訂正されているのである。平安朝の物語作者も種々の文學態度を持している。この作者は、女と花の metaphor をあまり好まぬ種類の人らしく、人間と人間が釀し出す現實の取引を描く事を好んだらしい。枕草子を瞥見すると、清少納言もこれに近く、「梨花一枝春帶雨」も、外國文學の權威の前に澁々その美を認めているのに過ぎず、結局、感覺的には、「愛敬おくれたる人」の顏であつたらしい。

眞正面から女と花を竝べたてた作品を探し求めると、やはり堤中納言物語中の「はなだの女御」ということになる。この一編には、大きな竄入もなさそうである。しかし、テキストの不完全な爲、我々にとつて難解な作品であるが、多くの宮仕人が、その女主人を花に喩える興味の上に自分達の戀愛交渉の過程を添えて、構成を全うしている事など、やはり優れた作品の一つに數え上げてよいものであろう。その花喩えの部分を拔いてみる。

御方こそ、この花ほいかが御覽ずる。と云へば、いざ人々に喩へ聞えむとて命婦の君、かの蓮の花はまろが女院のわたりにこそ似奉りたれと宣へば大君、下草の龍膽はさすがなめり、一品の宮と聞えむ。中の君、玉簪花は大王の宮にもなどか。三の君、紫苑の花やかなれば皇后宮の御さまにもがな。四の君、中宮は父大臣つねに、ぎきやうを讀ませつつ祈りがちなめれば、それにもなどか似させ給はざらむ。五の君、四條の宮の女後、露草のつゆにうつろふとかや明暮のたまはせしこそ誠に見えしか。六の君、垣穗の瞿麥は承香殿と聞えまし。七の君、刈萱のなまめかしきさまこそ弘徽殿はおはしませ。八の君、宣耀殿は菊と聞えさせむ。宮の御覺えなるべきなめり。麗景殿は花薄と見え給ふ御さまぞかし。九の君。と云へば十の君、淑景舍は朝顏の昨日の花と歎かせ給ひしこそ、道理と見奉りしか。五節の君、御匣殿は野邊の秋萩とも聞えつべかめり。東の御方、淑景舍の御おととの三の君あやまりたることはなけれど、大ざうにそ似させ給へる。いとこの君ぞ其のおととの四の君は、くさのかう、といさ聞えむ。姫君、右大臣殿の中の君は見れど

も飽かぬ女郎花のけはひこそし給ひつれ。西の御方、帥の宮の御うへのさまにや似させ給へる。伯母君、左大臣殿の姫君は吾木香に劣らじかほにぞおはします。など云ひおはそうずれば尼君、齋院、五葉と聞え侍らむか。變らせ給はざむめればよつみを離れむとて、かかるさまにて久しくこそなりにけれ。と宣へば北の方、さて齋宮をば何とか定め聞え給ふ。と云へば小命婦の君、をかしきは皆とられ奉りぬれば、さむばれ軒端の山菅に聞えむ。まことや、まろが見奉る帥の宮のうへを芭蕉葉と聞えむ。よめの君、中務の君のうへをば、まねく尾花と聞えむ。

以上のように二十一人の品定めが續いて、又、その花を詠込んだ短歌も加つているのである。そして、物語の進行するに從いそれぞれの花は再び自分達の戀の過程の暗示に用いる、という二重の働きを含んで來るのである。この主なものを整理してみると、命婦の君が女院に比した蓮は、その短歌によれば「心のひろさ」を現し、皇后の宮の紫苑は「はなやか」であり、中宮の桔梗は「祈りがち」の日常生活を現し、四條の宮の女御の露草は「露にうつろふ」命を豫想させてその通りになり終つている。承香殿の瞿麥は六の君の戀愛過程によると、「とこなつ」ではなく結局「思ひしげし」に終る事を示している。又、弘徽殿の刈萱は「なまめかしさ」に於て撫子に勝り、宣耀殿の菊は、ますます「しげりまし」、麗景殿の花薄は「思ふ方になびき」、淑景舍の朝顔は「昨日の花」を嘆く。中の君の女郎花は「見れども飽かぬ」美しさであり、齋院の五葉は「かはらぬ」色を保つのである。

しかし、この花喩えも metaphor の嚴密な意味のものではない。現れているものは、多くの宮仕人が、敬愛する女主人を圍繞している香りを花と比べた鑑賞風景に過ぎぬ。換言すれば、登場人物の宮仕人と同一階級に屬すると思われる作者は、描寫したのではなく、花を通じた自己を象徴したのである。そして、その成立の契機は、その時代の人々が共通して肯定した、花と女の個性であつたから批判としての記述の意味が認められるのである。この作品を讀む時に働く我々の雜多な智識は、ききやうを無量義經と結び付け、あさがほから「槿花一日自成榮」と古い支那の詩人の嘆きを呼び起し、露草の露の命と感傷し、なでしこから愛子を想い、染殿の太后を考えつつ常夏と延長して、「常懷しく」や「床」に續く連想の女えと擴大して行くのであるが、それが、この文藝作品を理解することにな

るのであろうか。修辭のたどる理論は單純だ。が、その裏にある現實の實相は我々の手に負えない困難を含んでいるのである。このmetaphor の理解えの條件になるものは、女主人の面影と宮仕人の戀愛を二重寫しに象徴している紫苑や桔梗の花々である。この花は我々の花の如く廿世紀の科學の公共圏内に於ける花々ではなく、平安朝の佛や神や精靈の陰に浮ぶ花々であると云う點であろう。確かに、今日の我々も「薔薇の乙女」と象徴するが、これはロマンティシズムの傳統を、だらしなく慣用しているだけのことであつて、何も信じていないのである。だから今、我々がバラを尾花に置き變えたとしても、女房のやった二重寫しは發生するわけがないのである。彼女等とその女主人の生活は我々と違う花によつて象徴されている事を感得するのが、この作品の文藝的理解えのカギなのであろう。平安朝の女房の特殊體驗であり、換言すれば過去の我々の體驗である花喩えは、例え一定の象徴として成立しているものとはいえ、概念的分析により完全な理解に達する事は不可能に近いものである。その中え融け込む各人各様の味得のみが、唯一の方法なのであろう。それは歴史的條件を無視せよと勵めているのではない。唯、この味得を基礎としてこの metaphor の價値判斷にと進む以外に道の無いことを云つているのである。ここに於て、象徴は生きるのである。

平家物語を繙くと、「重衡東下りの事、同じく千手の前が沙汰」の條に「平家は代々文人、歌人たちでござるものを。一年平家の一門を花に譬へまらした時は、この人をば牡丹の花に譬へてござると申たれば……云々」とある。これは手近にあった天草本を引いたのであるが、流布本も、同じ記述である。「この人」は勿論、重衡を指しているので、相憎、女性ではない。しかし、散文に於て、この記述と關聯があると思われる(註一)「平家花揃」という書がある。平家一門の男女を竝べて花に喩えたものであるが、この書から二、三摘出してみよう。

建禮門院清盛公の御娘安德天皇の御母公　たいゑきのふよう、びやうの柳にもかよひ給へど、是はなをなつかしく、うつくしきさがのの秋のをみなへし、露をきわびたるよりも、心くるしく、なでしこの露にふしたるよりも、らうたくめでたき御有さまとならん

宗盛公のうへ　のりもりの女能との守のいもと　しら菊の、をきわびたるよりもなをうつくしき、ゆう月かげに紅葉のちらぬほどとや申さまし

小督殿少納言信西の孫櫻町の中納言女　よろづあかぬ所なく、うつくしうこそ見え給へ、すずしげなる夏草の中に、やまとなでしこの咲いでて、露おもげにうちなびきたるけしき、そこはかとなく心ぐるしくみる、とや思ひよそへられ給はん

なでしこの露に袖をぬらすとも、心のままに誰か折るべき

上西門院小宰相殿　これこそ又、見る人いかにもただには有まじきにほひ、かみのかかり、かたのわたりなど、たをたをとなまめかしく、いとありがたく見え給ふ。さのみ柳櫻かへすかへす申やうなれど事かはりてなむ、硯のふたに柳櫻のうすやうしきて八重ざくらに文付たると申さん

花の色はただ見るだにもあるものを、なさけをそふる人のことのは

「はなだの女御」は美しい作品であつた。その文藝的効果を靜態的に考察すると、作者の概念の聯結が不明瞭な個所が反つて流動する効果を強めている作品であつた。そして、その世界は、花々と共に生きた人達の創り上げたものであつた。それならば、花喩えの現れは、その「美」を觀照した結果の處理法であつたのであろうか。そんな事はない。一日の生活、自己の五感が活動して味つている現實を切實に象徴するのに、この頃としてこれ以外の方法がなかつた爲である。美はその價格に過ぎない。後世が論理的に追求するのに不可能に近い困難を感じさせる霧に包まれた現實の象徴が花喩えに現われているのである。そこに我々の花喩えとは、鷄卵と擬卵の運庭を生ずるのである。だが、この生きて働いた花と女は、時代の下降と一緒に死んで行つたのである。換言すれば、文學活動の始初である第一象徴形態が借りものになつて來たのに、幸か不幸か、その花喩えは修辭學として後々まで傳統し續けたのであつた。今ここにあげた「平家花揃」もその一つであつて、云つてみれば枯死した花園である。修辭學は花の香を寫し得ない。この記述では、よしそれが社交の手段であつたとは云え、女房の前栽の歌に用いた技巧すら忘れている。實體を失い、傳統をなぞつている貧しい花喩えは尙も執拗に續くのである。

共に江戸時代頭初に成立した（註二「四十二のみめあらそひ」と（註三「露殿」を開いてみる。

廿番

左持　いつも

くさきのはな、枝をきり、十よ日雨つゆにうたせしほたれたるに、ふむふむとにほひ、ここちあしくて、あたりにをくもいやなすかたと

右　こしま

こむにやくのはな、水くみすてし古きつるへのはれかけたるに、土くれ入て、こんにやく玉とやらん云物をすてをけは、をのれとをひいてて、葉ひろこりたるすかたと

豐藥助卜泉院

こんにやくもくさきも人のとくそかし、かまへて誰も聞しめさるな

廿一番

左　左大夫

しやかのはな、われもはなの數と、しまんしたるやうに咲ふくれて、はなの根もとは、つちよりあらはれ、みくるしくやふしかくれ、あるひは細みそのかたはらを、しやかすみ所として咲たるすかたと

みき　大夫

きほうしのはな、うつろひすきて、みる所はあらねと、ことかくときのはなのかすめきて、水たこにつる入たる姿と

土佐坊阿闍梨道文字法印

きほうしを橋のひやうふの繪にかかん、しやかつらのこと人はかかれす

一、たかしまのまへ　うの花

――「四十二のみめあらそひ」――

らの花の、雪かなみか月かなとと、あやまたるやうに、かきねにさきみたれたるは、いつくしうおもしろけれは

一、かつらきのまえ　山ふき

いろかいつくしさ、もとよりいふに及ひ侍らす、きしねなとにさきみつれは、水のいろまて花にそみ、なみのひひきにも、花のかほりくる心ちなむしけり、古き歌にも

春さめにほへるいろもあかなくに、かさへなつかし山ふきの花

一、みねのまへ　藤

あるひは松かえ、あるひは柳なとよりさきさかりて、風になみよるふせい、たくゐすくなきものなり、されは我ゑたならぬえたをも、わかえたとして、はいまとはれは、しよほくのすかた、ふち一花にあらはれり

一、左源太のまへ　なてしこ

ませのうちに、すかたかほはせ、いつくしう、しほらしうさきつれたるに、うすくこく、花のいろに露のをけるふせい、いふはかりも侍らす

一、けんはのまへ　おみなへし

ふるき歌に

おみなへし秋の野風にうちなひき、心ひとつを誰によすらん

——「露殿」——

「四十二のみめあらそひ」は元吉原の遊女を「むかしの四十二の物あらそひの名をかりて、此あまたの女の中を四十二人えりいたして、四十二のみめあらそひと名を替て、廿一にあはせ、きくさの花にたとへ、をのれをのれのこころをみむ」とした作品である。貴族臭の強い、詞書のある歌合せに過ぎないものであるが、注意すべきことは、花喩えに depreciate な態度が現れて來た點である。美しい射干の遊女も足もとの泥を掘出されて見苦しい根を現わすと云う減價的態度による批判が處々に浮出して來た事は興味深いものがあ

る。一方、「露殿」の花喩えは、まことに古風である。謡曲仕立の効果や古典の parody がその主調を執り、史記の語が現れる程、近世に嵌入している作品でありながら、この緩慢な遊女名寄を取入れている。「さて人間にあそぶ事、遊女の道にしくはなし。されども今の世の遊君は人の皮着る狐也。ばかされ給うな人々よ。御用心」と呼びかけるような近世風の他の部分に對して、高低をもっている。が、「四十二のみめあらそひ」にも「露殿」にも、不均一ながら近世の發芽は認められるのである。

他方、いわゆる實用の書は、近世に於ける不羈の作者と云われる人が、蚤と虱に責められる戀を描く以前に、早く、花喩えをはつきりと脱却しつつあった。寛文末刊と云う（註四）「吉原天秤」から拔き出してみる。

小太夫

氏君のかんはせ、大はくの菊花をかめに一本さしたるかことし。前は御字にてありしか、おりられたり。ざはいあしからす。ささもつよし。

なんせは、御心たてあまりよからす。床の内あちすきてつくろひかまし。おもてに白ふんぬりすきて、雪女かともあやしまる。たう中もとより、こたけなるに、こしかかみて、なにとやら、しさいらし。されとも、もつはらはりつよし。

せいしゆ

せいすらりとして、さなから五しやくのあやめに露をそそきたるかことし。面躰ものおもはしきふせいあり。さはい、としまゆへに、こうしやなり。

なんせは、たうちうこしかかみて、みにくし。心たてわるかしこくて、しかも、てとりものなり。あはんとおほさん人、かまへて心ゆるしたまふな。もはや、つとめもあきたるよしなれとも、なにやらくびたけおひ給ふゆへ、身ぬけかならぬよしのとりさたじや

ここに來て俊巡していた花喩えは紛碎されようとしている。碎かれた片々は、形骸として危く附着しているが、もはや主題をかなで

る metaphor の機能は消失しているのである。又一方、比較される本態として、ふんわり薄絹に包まれていた女性も、その肉體も精神も明るみえ晒し出されている。批判の態度は鑑賞から減價的方法えと押進められて來ている點も顯著である。これは過去に於ては有力な方法ではなかつたもので、近世文學の一特色として浮び上る、畏怖すべき權威を引下げ、嫌惡すべき汚濁を暴露する態度が現れている。人前でオデキをつぶしてみせるのである。

花喩えを捨て去つたのは實用の書であつた。花喩えの斷片の附着狀態を示す爲に「吉原天秤」をのみ此處にあげた不備はあるが、當然、批判態度に於ては「難波物語」に遡れるものである。假名草子と分類されるものの大部分は、實用の文學、卽ち啓蒙教化の目的を具有する（評判記を含む）一連の書である。これらは所謂、純文學書と區別され輕視されねばならぬと說かれているが、その決定でよいのであろうか。過去に於ては啓蒙教化ある故に高し尊しとされたものが、やがて、その故に非文學の印を捺されたのであるが、どうやらこれは十九世紀文藝論の頑なな遺傳らしい。教訓文學を美學から取除くと云うゲーテの言葉を尊重し過ぎた結果らしく思われる。文學は常に新しい心理的體系を創り上げる事である。それが實のる過程は現實に働きかける實踐のみであろう。勿論、この現實とは社會と呼ばれる公共圈のみを意味してはいない。實用の目的にのみ使用を許されて、文學に使用出來ぬ思考というものは考えられない。比較は少しずれるが、作者が文藝意識を持つた結果が文藝作品になる事ではないのと同じようなものである。評判記の作者が多く智識階級に屬する人々であつたと同樣に、當然、堅い教化臭を濃厚に持つ作者は、それが露に認められる人々であつて、殊にその人達は、高所から發言したのではなく、民衆の水準に於て生活して、その時代の社會のモラルの動きに絕えず關心を持ち積極的に働きかけた人々である。「可笑記」も「爲愚痴物語」も「似我蜂物語」も、ある時代のモラルと取組んだ作品であつて、花喩えの律し切れぬものを發見した眼によつて記述された書である。かかる實用書とほとんど同質のものは過去にも存在していた。顯著な例をとれば、十訓抄をもつて代表させ得る鎌倉の抄物系の一群で、方丈記も含めて數え上げられる種類のものである――管見によれば、同書は、現世は如何に處理すれば最もマイナスの少ない生活が出來るかというテーマを明瞭に、それだけを說明した小論文であると思うからである――。この一群は、その態度に於ても diction の變革に於ても假名草子に近い役割を果したもので、共に歷史の轉期に生れ會つた文學であ

る。かかる文學は必ず新しい時代の合理性を主張する。この主張の結果の善惡は後世の批判の問題であるが、唯、かかる努力は必ず過去とは別な、獨立した心理的存在を出現させる源泉となるものである、

十七世紀のレアリスト達の眼前にあつたものは何であつたか。其處には哲理に反する實踐道德の墮落があつた。佛教の戒に脊く肉體の高揚が公にされて來た。これをなんと處理すべきかという問題と取組んだのである。この人々は確かに好んで支那の古い聖賢を語つた。が、それが單に德川氏の指導に頭から順應したに過ぎないのならば、三教一致にあれ程の努力を拂う必要はないはずである。この人々の過去を語るのは、權威に盲從しただけの事でも、現在を捨てて古い夢を樂しむ爲でもない。それは、現在が進むべき根幹を過去から求める努力の現れであり、又、過去の例によつて分り易く現在を說明する——信據性を高める意味も多分にある——理由からであつた。それであるから、その作品は決して想像の上に建てられてはいない。觀察と研究の上に載つているのである。中世の文學は幻想的であつた。神祕的であつた。我が眼で觀、我が心で感ずるものの凡てに遠慮を含んで接する態度である。肉體も精神も明快に表現する事を憚る鬱々とした狀態が存在していたのであつた。丁度、この頃 Robert Burton の解說した憂鬱の病狀は、この日本にも存在していたわけである。この憂鬱症が治療出來ぬ限り、律動の無い虛飾の花喩えは續いていたのであつたが、やがて、近世の複雜な焦躁は下降して民衆に廣く浸透して來た。これに對し智識階級の或る者は啓蒙教化という處理法を撰び、或る者は眼隱しを捨てて、凡てを減價批判し、秘めたるものを剔抉する態度を撰んだが、共に幻を拒否する人々であるから、これをレアリストと稱して大過ないと思う。彼等の著述したものが眼前の生活と取組む實踐の規範を離れぬのはその爲であつて、背後に當然存在していた儒教的、佛教的形而上學そのものの發展は「別の仕事」に屬していて、教化の書とはいえ、類推による以外にその全貌を知る事は困難なのである。

レアリズムの文學は觀察とその研究に建つ精神で記されたものである。巧拙を除けば、西鶴にのみそれは與えられ、偶々、實用の意圖を持つ爲に與えられぬのは、やや當を得ないように思う。假名草子の一連は、動搖の醒め切らぬ時代の要求した批判の文藝であり、合理の世界に導く努力でもあつたのである。

しかし、この力强く現實に對處した文學もいつまでも續かなかつた。强い緊張は保持すべくもないのである。進展とは弱體化を意味

する下降期が來るのであつた。

文藝を離れて、啓蒙教化の精神自體の進展を辿るとそれは心學に連つている。梅巖、堵庵の倫理學にその主流は吸收されてしまつている。宗教的觀念を折衷した通俗儒學である心學の目的は、結局、町人各自の「齊家」にある。その爲には經濟的要請である「儉約」を一つの根本道義にまで高めたもので、これこそ封建制度の完全な整備を終つた十八世紀の要求に答えたものであつた。當然、その態度は時の制度に對して屈從的であり、十七世紀の作者の有した氣魄は、ほとんど失われてしまつたのである。文藝作品も、これと同じ傾向えの進展を辿つた。評判記は商賣の便覽と化し、教化ものも弱體化した作品群に連結して來る。即ち、自笑、其磧の再結合以後の八文字屋本は町人氣質の一種として濃厚に教訓調を混入した作品を出しているが、享保という時代を思い合すれば、それは單なる迎合精神の生んだものとしか考えられない。それに續く數多い「談義物」は、最も古いものといわれる摩志田好阿の「當世下手談義」の序をみても分る如く、此等は自笑、其磧より一層、石門心學に――この場合は貝原篤信に――近づいて、やつと息をつぎ得た事を自ら語つている。その含む笑いは後世の横溢した才智が創り出した洒落本系の笑いではなく、かつての一圖な教化精神が屈從化した姿の現れを示しているものである。

畏怖を捨て、肉體や精神の汚濁を露呈さす態度を撰んだ文學も、その根本は啓蒙教化と同一なものであつて、即ち、人間を善くしようとする立場にあるのである。この態度がうまく育つて行けば、必ず立派な作品が現れるはずであるが、この精神も徒らに散開してしまつたようである。この精神の初期段階に於ける文藝的大成は、西鶴の功に歸せられるものであるが、本稿は西鶴を論ずる任務を持たない。唯、彼の文學を大成させた特色の一つとして、特殊な階級に屬する人間を提示して、その特質を數え上げて露呈するという態度がある。が、この事は當然、彼の次に來る作者は更に一段と細かい特質を提示しなければならぬ事を要請される事になるわけである。彼に續いた諸作者は、その努力の爲に反つて豫期しなかつた概念化した類型を描いてしまつたのである。depreciate な態度を持する文學を正しく育てる爲には、この人々は餘りに力量不足なのであつた。特異な才學を誇る平賀源内に期待を寄せても、その數奇にまけて自嘲に終つてしまつたし、三馬の才能では勿論、打開出來るわけもなかつた。觀察はいよいよ細かく分析に向つて行つたその腕前は

認められても、反つて人間をバラバラな小道具に散らしてしまつたのである。時の言葉を用うれば、うがちに消え去つたのである。例えその作者は意識しなくとも、この頃に於て、權威を剝ぎ取つて人間を平等に觀たものは秘書の類であろうが、これらも挑撥の枠を離れられず、性から生命の發芽を掬び上げる類の記述を發見することは困難である。

花喩えは十七世紀のレアリズムの精神によつて散文界から捨て去られたことは既に述べたが、誤解を避ける爲に記すと、このレアリズムとは、過去と異る思考の發見を意味するものではない。幻よりも現實を尊重して對處するという取捨撰擇の體系を意味するものである。この精神が嫌い去つた幻に、花喩えが含まれていた事を意味しているのである。勿論、花喩えだけが幻の全部ではない。源平盛衰記あたりの好んで用いた傳統をそのまま受繼いている「婀娜とたをやかな翡翠の髮ざし」も「宛轉たる双蛾」も消え去り、(註五)「美人揃」も當然、同樣な宣告を受けている。散文界は、この新しく撰擇された道を一樣に進んだようである。それは明快に記述される方向には歩んだが、流動する美しさを復活する望は薄くなつたのである。

しかし、夢や幻に依存する文藝が凡て消え去るわけはない。流れる情趣を味うことで主たる滿足を覺える、語り物、歌謠などの詞章を檢討する必要がある。

(註六)「松平大和守日記」をみると、次の如き記事が載つている。

源氏花揃

寛文四年十月廿五日、晴天靈臺院殿攝州裏方、おつうとのおあくり振舞操執行。辰下刻操初り、太夫肥前掾也

又、萬治四年二月十三日の記事に、當時の說經節と淨瑠璃の草子の名をあげているが、その中に「源平花揃」という名稱が載つている。これらは前述した「平家花揃」と再び重大な連關があるものらしいし、花喩えの傳統を考える上にも、まことに貴重な名稱であるが、その正本を失つている現在は、唯、その名稱をあげるに止るより仕方がない。內容の分つているものを取上げてみると、例えば淨瑠璃の十二段草子を開いて讀む我々にとつては、二段目の前栽の花揃えは、花の名前の羅列であつて、花屋の飾り窓に過ぎない記述である

が、語られたそれを樂しんだ昔人は、ここに至ると何んの説明は無くとも、御曹子と結ばれる美女の出現を豫感したものに違いない。花と女の結合の傳統は、誰でも心得ていた約束であつたはずである。この幻の約束がないのならば、閑吟集も、隆達小唄もその一部は成立が困難なようである。

さてもそなたの立姿、春の青柳絲櫻、心がたよたよと

——(松の葉卷一)——

思い初めたよ濃き紫の色に出でじと包むに餘る、袖に涙は、のんさて眞事に零れぞかかる、戀慕れんれつれ(合ノ手)知らぬ昔は他所なるものを、今は身に知る愛別離苦の憂さを思えば、のんさて眞事に、情も辛や戀慕れんれつれ(合ノ手)召せ召せ草花何々ぞ、夫待つ夕顔白菊の、花咲き初めて美人草に戀草、ずんど秋風の立たぬ間に、靡かさんせ女郎花、お差合は御座んせぬかいの、ちよつと苅萱

——(同卷二)——

この型通りの花喩えは加賀節にも半太夫節にも河東節にもあつて、allusion として、江戸小唄の修辭學に細々と存在しているのである。

他方、誹諧に於ける需要も多分に考えねばならぬことであろう。あの詩形の短かさをもつて、自然も生活も響かせようとする誹諧は、必然に allegory や metaphor を要求するわけである。

一家に遊女も寢たり萩と月

この匂いの後方に臥しているものは長い時を生き續けた「女と花」の影繪なのである。

（註一）平家花揃――上下二卷合本。貞享三丙上春と刊記。赤木文庫藏本。跋によると「君達花ぞろへ」という寫本を繪入りにして開板したものらしい。赤木文庫本は、故頴原退藏博士藏の寛永版より人物が七人多い。刊行されたことはない。

（註二）四十二のみめあらそひ――假題。縱八寸二分。横五寸七分。胡蝶裝。墨付十六葉。赤木文庫藏本。石田元季氏の飜刻と最近古典文庫より、露殿、あつま物語と合せて刊行された。

（註三）露殿――繪卷三卷。全長、百八十餘尺。繪、二十九圖。本稿は雜誌「浮世繪藝術」に載つたものを繪卷の寫眞で校合した原稿よりとつた。

（註四）吉原天秤――原本未見。稀書複製會第九期の複製本より本稿をとつた。

（註五）美人揃――一例を薄雪物語より拔く「……物にたとふるに、女三の宮のたちすがた、おぼろ月夜の內侍、こき殿のほそどの、揚き妃、李夫人、れんせうじやう、せいしのまへに十郎御ぜん、しまわうひめ、松浦さよひめ、衣通姫、ときは御前、皆鶴女、をのの小町や天女のひめ、當麻の中じやうあやめのまへ、吉じやう天女まや夫人、まこもの前に千手の前、しづか御前ほしのみや、いづみ式部こがうの局、大いその虎きやうだい、うつろひやすき花のいろ、むらさきしきぶ佛御前、ぶんごの國なるまのの長者のひとり姫、たまよの姫をはじめとし、もろこし天竺わが朝に、び人多しと申せども、いかでか君にはまさるべき……」

（註六）松平大和守日記――松平直矩（家康――結城秀康――直基――直矩）の明歷四年より元祿八年までの日記で、藝能方面の信據すべき根本資料の一つである。松平家に傳わる原本は戰災で、又、村山圖書館の寫しも戰後の火災で失われた。本稿は若月氏の「近世初期國劇の研究」に載せてある同日記より引用した。